

齋藤智裕著「KAGEROU」ポプラ社 2010年12月15日刊を読む

一気に溢れ出した涙に顔を歪めるアカネの肩をヤスオはそっと抱き寄せた。やさしく背中をさすってみると、手には薄い皮膚と骨の感触が伝わってきた。これがアカネの病魔と闘いながら必死に生きてきた証だと思うと、目頭が思わず熱くなった。

「この世の中に『生きてちゃいけない人』なんかいないんじゃないかな」

ボソリとした口調だったが、それはヤスオが自分自身に対して発した悔悟の言葉でもあった。

「『明日はもう生きられないかも』」って思いながら生きてるとね、今日という日がどんなに大切に、貴重で、特別な一日かがよくわかるの。なにを見ても聞いてもキレイで、感動的で、愛しくて、空を飛んでいく渡り鳥の群れや公園でじゃれあってる仔犬を見てるだけで自然に涙が出てくるの」

P205

#### [コメント]

生命の大切さをドナーという小説の形で表現した作品。人間の尊厳を考える上で勉強になった。

- 2010年12月15日 林明夫記 -